

月曜日それとも火曜日

(『幽霊屋敷』から)

A Translation of Virginia Woolf's "Monday or Tuesday"

from *The Haunted House* (1945)

坂本正雄 訳

Sakamoto Masao

2005年10月5日受理

ゆるゆると、まわりには頓着せず、その翼からたやすく空間をたたき出しながら、行く先をはっきりとらえ、そのおおきぎは空の下、教会の上を通り過ぎる。白く、遠く、とけ込んで、たゆまず空は広がり狭まり、動き、とどまる。湖なのか。その岸辺を消してしまえ。今度は山なのか。おお、素晴らしい。金色の太陽がその斜面にかかっている。金色が落ちてゆく。それからずっとずっと、シダの茂み、それとも白い羽。

真実を求め、待ち望み、二、三のことばをひねりだし、ずっと求めている（叫び声が左の方から、別の声が右から。ときおり車輪がぶつかっている。バスがぶつかり、ごった返す）ずっと求めている（時計が、正午だよと十二の鮮明な鐘の音で知らせる。光が金のうろこを流す。こどもたちが群れる）ずっと真実を求めている。丸屋根が赤い。木々にコインが下がっている。煙が煙突から流れる。吠え声、叫び、「鉄、売るよ」の呼び声、それから真実。

黒それとも金色をかぶせて、一点の元に男の脚、女の脚を照らし、（もやのかかった今日の天気、お砂糖か

しら、いえいえ結構ですよ。未来のイギリス連邦）炉の光が飛び散り、黒い像、その輝く眼だって、部屋だってみんな、赤に染める。外では、馬車から荷を下ろしている。どこやらのお嬢さんが机でお茶を飲んでいる。

得意満面に、木の葉のように軽く、曲がり角では漂い、車輪のところをふうっと横切り、銀色の模様を付け、我が家へそれとも別のところへ、寄り集まり、離れ、それぞれの大きさに漂い、上へ下へとかすめ飛び、離れ、沈み、寄り添う。そして真実は。

さあ白い大理石にしつらえられた暖炉のそばに集まるために。象牙の深みからことばがわき起こり、暗黒を流し出し、花を咲かせ、しみこんでゆく。その本を落とし。炎の中、煙の中、時折の火花の中、あるいは航海し、四角の大理石のシャンデリア、下の尖塔、インド洋。空は急に青になり、星がきらめく。真実かしら。それとも親しさに満足しているのかしら。

ゆるゆると、まわりのことには頓着せず、おおきぎは戻ってくる。空は星を覆い隠す。それから星を全部見せてくれる。